

PHOTO 重田琢也

生研 ニュース

IIS NEWS
No.138
2012.10



●副所長
加藤 信介

IIS
TODAY

御自らスーパークールビズで、ご自身の風圧実験モデル前にお越しいただきました新副所長・加藤信介先生です。ご専門は「都市と建物に関わる空気の流れ、安全・快適空間の創成」です。様々な分野から共同研究が持ち込まれるようで、このようなモデル実験や乱流の数値シミュレーションを行い、安全で快適な都市と建築空間の実現に努めておられます。快適の評価には個々人で大きなバラツキのある知覚が関わり、多様な評価軸を伴うので、どうしてもバランス感覚が求められるとのこと。そのうえで劣等解ではないものを求める、いわば作戦研究と称される分野の一つだそうです。これを加藤先生は「多目的最適解の探査」と表現

されてました。普段よりそういった decision maker の手助けをするアドバイザー的視野をお持ちで、明快なご説明も然り、また普段よりこやかな先生のお人柄もあり、良き参謀として副所長に任命されたのかなあ、と遠慮がちにおっしゃられていました。副所長としては、所内エネルギー・タスクフォース・建築担当とのこと。省エネと美の追究は次元があまりにも違いますが、生研内の空気の流れを多目的最適解探査で最適としていただけるよう期待しております！

(小倉 賢)

「都市の脆弱性」をテーマとした リヨン大学との合同ワークショップが開催される

9月6日(木)～7日(金)、都市の脆弱性をテーマとしてリヨン大学と本所との合同ワークショップが、横浜市役所ご支援のもと、横浜市Bankart1929およびハンマーヘッドスタジオ新・港区にて開催されました。リヨン側からは、ルソー・リヨン大学学長、アリュール・リヨン副市長(Le Grand Lyon 副議長)をはじめ、産官学の専門家10名が来日されました。本所をはじめ、情報学環、新領域創成科学研究科、工学系研究科の学内関係者や、横浜国立大学、横浜市役所など日本側からの出席者と、ラウンドテーブルを囲みながら、少人数による発表・討論を行いました。工学・社会科学の粋や、日仏の発想

の違いを超えた、刺激的な議論が展開されました。

7日午後には、「スマートコミュニティ」をテーマにした公開シンポジウムも開催され、リヨン、横浜、柏の葉、長崎EV&ITS (Electric Vehicles Intelligent Transport Systems) プロジェクトでの実践例について密度の濃い情報交換がなされました。

横浜での本ワークショップは、昨年(2011年)、リヨンで開催されたToday Forum 2011におけるワークショップに続く第2回目と位置づけられており、関係者の間では、来年第3回ワークショップをリヨンで開催することが合意されるほどの交流の盛り上がりもみせています。

なお、ルソー学長は、ご一行を率いて9月5日(水)午前中に本所を訪問されるとともに、同日午後には中塾本所所長司会のもと、本郷キャンパス工学部1号館15番教室にて、本学学生に向けて、「都市の脆弱性」にかかわる特別講義をして下さいました。講義終了後、学生諸君の質疑応答が1時間も続くなど盛況でありました。

本所は、このたび本学とリヨン大学との間で結ばれた全学国際交流協定の一翼を担って参りたいと思います。

(人間・社会系部門 野城 智也)



生研記者会見報告

9月6日記者会見

ー海底土のセシウム 134、137 濃度を 15km に渡って連続計測に成功ー

海中工学国際研究センター

浦 環教授

ソーントン、ブレア特任准教授 発表
(独) 海上技術安全研究所
小田野 直光係長

海中工学国際研究センター・浦 / ソーントン研究室では、海底土のセシウム 134 および 137 の濃度を計測できる小型ガンマ線計測センサを内装した曳航式海底放射線計測装置を開発しました (図 1 参照)。数トン程度の漁船で利用でき、母船から海底面上を擦って曳航して計測することで長距離の線的観測を行います。8 月、(独) 海上技術安全研究所と共同で、北茨城市沖合 18km (水深約 85m ~ 140m) といわき市沖合 13km (水深約 110m) の 2 カ所で、海底土のセシウム 134 および 137 の濃度を計測し、前者で 12.6km、後者で 2km にわ

たり連続計測することに成功しました。

データ解析から、茨城沖では、沖合に向かって、セシウム 134 および 137 濃度は ± 70Bq/kg 程度変動しながら 12km で約 1/4 になり、いわき市沖では、沿岸沿いに ± 50Bq/kg 程度変動していることが分かりました (図 2 参照)。この値は、文部科学省による定点観測結果とほぼ一致しています。

海中の放射性物質については、これまでピンポイントでのデータサンプリングによる計測しか行われていませんでした。放射性物質は海水中

では早期に拡散しますが、海底堆積物では長期間沈着するとされます。このため、海底面の広い範囲を長期観測する必要があります。開発した装置により、海だけでなく湖沼や河口などの放射性物質の詳細な面的分布を短時間に計測することが可能になりました。記者会見では、今後の具体的な計測計画について質問が寄せられ、発表後も多くの問い合わせが来るなど、社会の関心の高さが伺えました。

(海中工学国際研究センター浦研究室 特任研究員 杉松 治美)

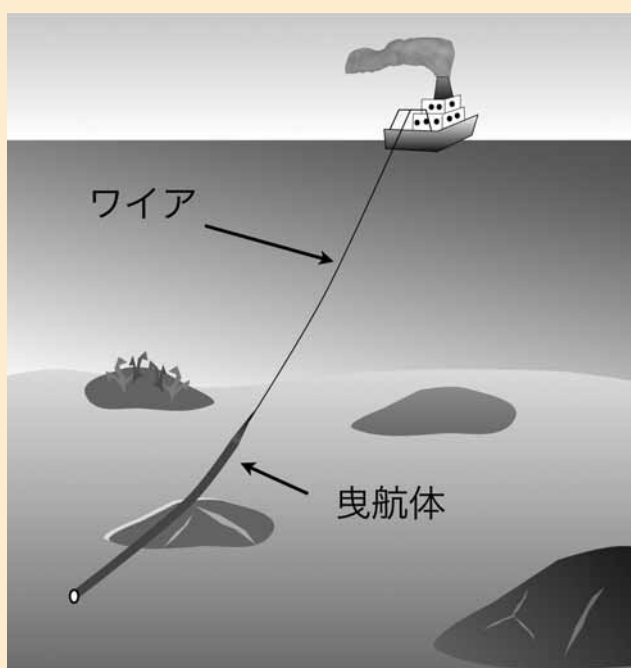


図 1: 曳航式海底放射線計測装置
(全長 8 m、直径 14.5cm、重さ 135kg)

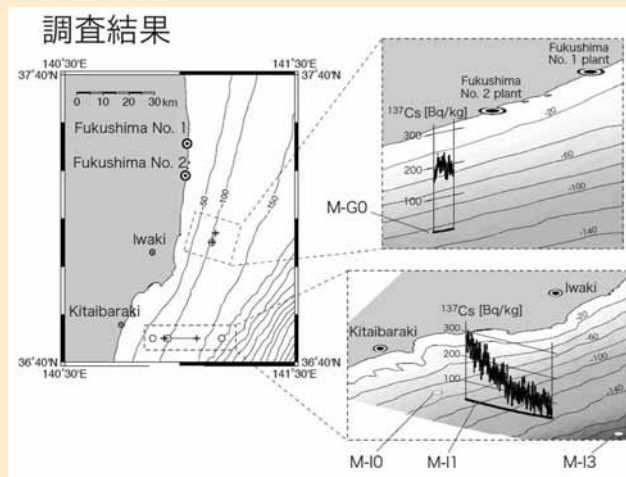


図 2: 海底におけるセシウム 137 の濃度分布
(いわき市沖および北茨城市沖)

第4回 IPSL (IIS PhD. Student Live) が開催される

今年で第4回目となる IPSL (IIS PhD. Student Live) は7月9日(月)に開催された。IPSLは、異なる専攻に所属する大学院生間の交流を目的としており、本所に所属する主に博士課程2年生の学生による研究発表会である。今回は発表者全員がスライドを使用した一分間のショートプレゼンテーションとポスタープレゼンテーションをそれぞれ英語で行い、留学生も積極的に参加可能な形式で行った。発表件数は全部で83件と去年を大きく上回り、大きな盛り上がりを見せた。今後は博士課程2年生以外の学生も積極的に聴講しに来られるための工夫をし、学生主導の魅力的なイベントが開催されることを個人的に期待している。最後に、教育・

学務委員会の先生方および研究総務チームの方々には初回の会議から当日の運営まで丁寧な対応でご協力していただいた。ここに記して感謝を表す次第である。

Best Presentation Award

・基礎系部門

羽田野研 川本 達郎

「A stochastic model of the tweet diffusion on the Twitter network (ツイッター上のツイート拡散の確率モデル)」

・情報・エレクトロニクス系部門

合原研 木脇 太一

「Unsupervised learning through entropy minimization (エントロピー最小化による教師なし学習)」

・マイクロナノメカトロニクス国際研究センター
竹内(昌)研 手島 哲彦

「A Parylene micro-fabricated device toward the analysis of parasite infection into adherent host cells (寄生虫細胞の感染メカニズム解明を目指した、宿主細胞パターンニングパリレンマイクロ加工デバイスの作製)」

運営委員

山口 健洋、川田 治良、
小林 由枝、川西 咲子、陳 坤、
Tawin Tiratanapakhom

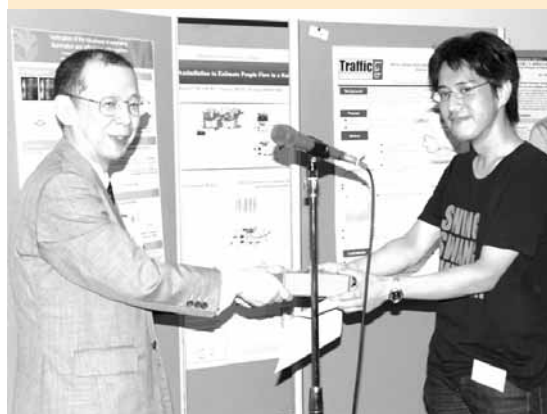
(マイクロナノメカトロニクス国際研究センター
藤井(輝)研究室 博士課程3年 川田 治良)



開会式での所長のあいさつ



川本達郎さん



木脇太一さん



手島哲彦さん

第12回東京大学生命科学シンポジウム (6 / 30) 開催される

初夏の行事として広く認知されるに至っている安田講堂での東京大学生命科学シンポジウムは、今年で第12回目の開催となった。本シンポジウムは、生命科学系の研究を行っている学内16部局が参加する本学生命科学ネットワーク主催のもので、本学の生命科学の市民への発信と共に、学内若手研究者間の情報交換の場を提供することで新たな融合研究の開始のきっかけになることをも目的としている。部局持ち回りでの実施もすでに2回目に入り、今回は本所と先端研が実行委員会を務めた。当日は、安田講堂でのシンポジ

ウムには440人余り、山上会館でのポスターセッションには学内から326演題の参加が得られた。午前・午後の講演8件、その間にポスターセッションを行い、懇親会で終了となった。学生や博士研究員を対象としたポスター賞には21件が選ばれ、懇親会にて表彰を行った。また今回は全く新たな試みとして、懇親会後半にパネル討論会「放射能とヒト、大地、海」を行い、先の原発事故後の放射能影響研究に係わっている学内研究者から、現状報告と生命科学系研究者の今後の寄与可能性について簡単な講演と議論が行われ、終了

まで多数の参加を得ることができた。今回は予想外に多くの民間企業の方々からご支援をいただき、以前にもましてウェブ等での発信や参加者へのサービスを強化することができた。講師の先生方やポスター発表者の方々を始め、ご協力をいただいた全ての方々に深く感謝申し上げます。なお、来年は医学系研究科のお世話で開催されることとなっている。産業界も含めた学内外の生命科学における新たな展開を育む場として、益々高く機能することを期待したい。

(物質・環境系部門 酒井 康行)



1



2



3



4



5



6



7

1. ポスター賞受賞者と長澤ネットワーク長および酒井実行委員長
2. 生研・先端研の実行委員会メンバー
3. 開会の挨拶をする清水孝雄理事・副学長
4. 閉会の挨拶をする長澤寛道生命科学ネットワーク長
5. パネル討論会の司会をする先端研・児玉龍彦副実行委員長
6. 安田講堂での講演の部
7. 山上会館でのポスター討論

第4回「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」シンポジウム開催

7月5日(木)、6日(金)の両日、本所コンベンションホールにて表記プロジェクトの、第4回目となるシンポジウムが開催された。今回のシンポジウムでは、プロジェクト終了時点までに、①実証計算を完遂させ、産業上の利用効果を明確にすること、②マニュアルやインターフェースなども含めてソフトウェアの完成度を高めること、③各ソフトウェアの普及の道筋を明確にし、プロジェクト終了後は自立的に普及が進展するようにしておくこと、が現下の最大の課題となっていることが表明された。そのような状況の中、6月に公開したソフトウェアの完成度を一層向上させるとともに、プロジェクト終了

後も本センターが中心となってソフトウェアの維持管理や普及を継続していくことが説明された。その後は、設計・開発現場で公開ソフトウェアを使用している方々から、先端的な実証研究事例を紹介していただき、ソフトウェアの評価に対する「生の声」を皆様へ届けることができた。

当日は非常に暑い日であったにもかかわらず延べ456名もの参加者があり、実用的価値の高いソフトウェアへの高い関心や「京」を含め

た大規模計算機環境にも対応可能なソフトウェアへ熱い期待が寄せられ、シンポジウムは盛会裏に終了した。

(革新的シミュレーション研究センター長 加藤 千幸)



7月20日 平成24年度新規採用教職員等研修



先進モビリティ研究センター (ITS センター) ITS セミナーシリーズ 18 「ITS セミナー in 群馬～次世代モビリティの今後と地域 ITS～」開催される

8月2日(木)13時より、桐生地域地場産業振興センターにて、東京大学ITSセミナーシリーズ「ITS セミナー in 群馬～次世代モビリティの今後と地域 ITS～」を開催した。当センターでは、研究成果の社会還元、地域のニーズに即したITSの普及促進、地域の人材育成、交流を目的としたセミナーを地域のご協力のもと主催しており、前身の先進モビリティ連携研究センター時代から通算して18回を数える。

群馬大学との共催で開催され、産官学から約100名の方々が出席した本セミナーは、当センター長の須田義大教授と群馬県産業経済部の根岸富士夫部長、群馬大学工学研究科の板橋英之研究科長の開会挨拶から始まった。当センターの田中敏久客員教授が司会を務めた本セミナーは三つのセッションで構成され、第1部では当センターの須田義大教授と大石岳史准教授、大石敬教授がそれぞれ「サステイナブルな交通シ

ステム」、「4次元仮想化都市空間とITS」、「EV社会実現のための交通技術の課題と展望」と題して、当センターの取り組みについて講演した。第2部ではEVによる自動車産業の変革と地域活性化をテーマに、当センターの田中敏久客員教授、群馬大学大学院工学研究科松村修二客員教授、群馬大学工学部機械システム工学専攻天谷賢児教授、長崎県政策監(EV&ITS担当)鈴木高宏客員准教授が、次世代自動車(EV等)と自動車産業の今後の動向、群馬大学次世代EV研究会の取り組みについて、地域の再生可能エネルギーのEVへの活用例と街づくりの試み、EV・ITS実導入・実運用から見てきた地域型次世代社会モデルについて講演した。第3部では、次世代モビリティの動向と地域ITSをテーマとしたパネルディスカッション(モデレータ:須田義大センター長)が行われ、富士重工業株式会社技術開発部高橋努担当部長、群馬大学松村修二

客員教授、群馬大学天谷賢児教授、眞下寛治群馬産業技術センター長、鈴木高宏客員准教授が、地域特有のエネルギー事情を活かした次世代モビリティ開発の方向性、地域のニーズに即した地域モビリティ活性の方向性について、熱く議論を交わした。閉会の挨拶は、群馬大学共同研究イノベーションセンター伊藤正実教授に賜った。

聴衆との質疑応答では、マイクロEV開発の方向性に関する討議も行われ、安全・安心やIT導入による新たなEV時代の到来を会場参加者で共有した。会場外には群馬大学次世代EV研究会が開発した電動バスの特別展示が行われた。自動車だけを対象としない広義のITSによる利用者支援の研究推進について考えさせられる貴重な機会となった。

(先進モビリティ研究センター
助教 平沢 隆之)



パネルディスカッションの様子



セミナー会場の様子



群馬大学次世代EV研究会の開発した電動バス



須田センター長による開会挨拶の様子

第3回 低炭素社会技術フォーラム 「国際的視点から見た日本の電力」

8月3日（金）低炭素社会実現のためのエネルギー工学研究会主催による第3回低炭素社会技術フォーラム「国際的視点から見た日本の電力」が、本所コンベンションホールにおいて開催され、ハワイエ聴講も含め約370名もの多数の方々に参加いただいた。前半では松崎裕之氏（東北電力）に、カザフスタンとオーストラリアでのIPP（Independent Power Producer：独立系発電事業）の経験を、馬淵洋三郎氏（三菱重工）にインドでの工場建設時の電力状況を紹介いただいた。金子祥三特任教授（エネルギー工学連携研究センター）からは、「日本の高効率発電技術の世界的な位置づけ」と題し講演いただいた。後半では、奈良長寿氏（海外電

力調査会）より英国での電力自由化22年の変遷の歴史について、続いて筒井美樹氏（電力中央研究所）より電気料金の国際比較と国別の事情について、後藤美香氏（電力中央研究所）より発送電分離を含む電力構造改革の問題について講演いただいた。最後に橋本彰特任教授より、海外の状況を踏まえた上での日本の電力の有るべき姿について提案を行った。発表ごとに活

発な質疑応答が行われた。

（エネルギー工学連携研究センター
橋本 彰）



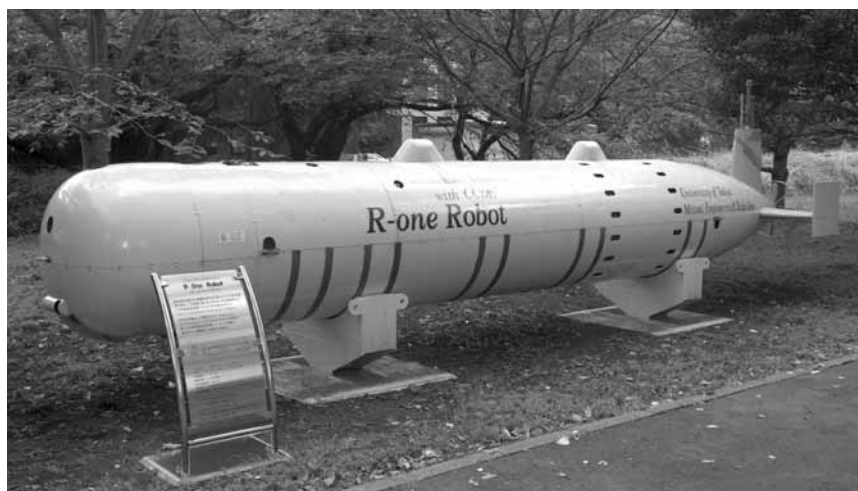
千葉実験所にロボット設置

9月13日（木）、千葉実験所の正門を入ってすぐ左手に巨大ロボットが現れた。長さ8メートル、高さ2mを超える巨体で、黄色いボディが緑のなかでひととき目立っている。本機（R-One Robot：アールワン・ロボッ

ト）は、海底熱水域の広域調査のために本所と三井造船（株）が1994年に共同開発した、24時間連続潜航できる自律型海中ロボット（AUV：Autonomous Underwater Vehicle）である。エネルギー源として閉鎖式

ディーゼルエンジン（CCDE：Closed Cycle Diesel Engine）を採用。様々な調査機器を搭載して、自らの判断で海中を全自動航行する能力がある。2000年にはサイドスキャンソナーによる海底火口の撮影・調査に世界で初めて成功した（伊東市沖海底火山「手石海丘」）。退役後は三井造船（株）にて余生を過ごしていたが、我が国の海中工学研究の歴史を知ってもらうため、本学第二工学部ゆかりの地でもある千葉実験所にて第二の人生が始まった。千葉実験所にお越しの際はぜひご覧あれ。

（海中工学国際研究センター
巻 俊宏）



バンコクの生研アジア拠点で 第5回社会基盤学国際学生セミナーを開催

8月20日(月)～21日(火)、タイ・バンコク市内のチュラロンコーン大学に設置している本所アジア拠点オフィスが中心となり、第5回社会基盤学国際学生セミナーを開催した。国際的な視野とネットワークを持つ若手研究者の育成を目的とした本セミナーは、2008年以降毎年タイで開催されており、今年日本から本所

都市基盤安全工学国際研究センター(ICUS)の学生5名と北海道大学から教員2名と学生3名が参加した。韓国とタイからはそれぞれ2大学が参加して、聴講者も含めて総計60名の参加者となった。初日の学生研究発表コンペティションでは16名の発表者の中、本学の学生一人が優秀発表者として表彰された。2日目の現地見

学会では、タイの王宮を訪問した後、昨年のチャオプラヤ川洪水で大きな被害を受けた旧本川沿いをボートで視察した。2日間という限られた時間の中であったが、学生たちは活発な意見交換を行いながら、国や大学を超えた学生間の親睦を深めていた。

(都市基盤安全工学国際研究センター
川崎 昭如・目黒 公郎)



現地見学会 (タイ王宮)



タイ生研アジア拠点オフィス



セミナー参加者による集合写真 (チュラロンコーン大学)

第2回生研サロンが開催される

7月30日（月）夕刻に2012年度第2回生研サロンがAn棟2Fテラス「キャンパス」で開催されました。当日の日中は猛暑だったのでテラスでの開催も暑さが心配されましたが、夕刻からは心地よい風が吹き、大変過ごしやすい中で大いに盛り上がりました。

今回は、マイクロナノメカトロニクス国際研究センターから竹内昌治先生、物質・環境系部門から荒木孝二先生にご講演いただきました。本所に着任されてもうすぐ12年になる竹内先生からは、「いきものづくり」というタイトルで、ご自身が研究にのめりこむきっかけとなった昆虫の足を使った歩くロボットのお話から、機械工学とバイオを融合させて様々な機能を持たせる研究などについて

幅広くお話いただきました。面白そうと思ったことを本当に実現してしまう竹内先生の実行力に感服いたしました。

荒木孝二先生には、「有機分子と有機材料ー「超分子」という視点から」と題してご発表いただきました。有機分子はわずかな構造の違いが大きな物性の違いを生むことや、その有機分子を設計制御してブロック化し超分子として有機材料を作り出していくという非常にスケールの大きい内容を、大変わかりやすく興味深くお話いただきました。

企画運営室では今後も生研サロンやイブニングフォーラムを企画しています。是非、ご参加ください。

（企画運営室 鹿園 直毅）

今後の開催予定は下記のとおりです。

- 第1回 イブニングフォーラム
10月22日（月）17：30～20：30
【テーマ：健康福祉生活】
- 第2回 イブニングフォーラム
11月5日（月）17：30～20：30
【テーマ：ものづくり】
- 第4回 生研サロン
12月5日（水）18：30～20：30
【川添善行先生、桜井貴康先生】
- 第3回 イブニングフォーラム
1月24日（木）17：30～20：30
【テーマ：人間中心IT】
- 第5回 生研サロン
2月18日（月）18：30～20：30
【小倉賢先生、石井勝先生】



PRESS RELEASE

生研関連新聞記事

以下の各紙に掲載された生産技術研究所の研究成果に関する記事について紹介しています。

詳細は、総務・広報チームにお問い合わせください。

・読売、朝日、毎日、日本経済、産経、日刊工業、日経産業

なお、その他の新聞に掲載されたものを本欄に記載することを希望される場合は、総務・広報チームへご相談ください。

最新記事	
・雷観測 スカイツリー拠点 高さ世界一634メートル 絶好の環境 〔8/29 毎日新聞 朝刊27面、8/15 産経新聞 朝刊21面〕	【石井 勝研究室】
●東大が新手法 ナノファイバーの向き制御 電気伝導度 異方性を30倍変化 〔7/20 化学工業日報 8面、日刊工業新聞 20面〕	【竹内昌治研究室】
●東大生研と福島・矢吹町 持続可能な復興へ覚書 まちむすびも本格始動 〔7/9 建設通信新聞 2面〕	【矢吹まちむすびプロジェクト】
●ボーイング、東大と研究 三菱重など参加 製造コストを削減 〔6/30 中日新聞 8面、6/29 日本経済新聞 11面、産経新聞 12面、東京新聞 7面、日刊工業新聞 6面、フジサンケイリビングアイ 6面、鉄鋼新聞 6面、朝日新聞(大阪) 11面、産経新聞(大阪) 9面〕	
・東大生研が新手法 作成効率5-6倍に 厚い細胞シート 複数塊状を同時培養 〔6/7 日刊工業新聞〕	【酒井康行研究室】
●日本初の欧州国際共同研究ラボ 東大生産研内に発足 〔6/15 化学新聞 6面、6/1 日刊工業新聞 18面〕	【藤井輝夫研究室】
●東大生産技術研究所 セシウム除染布を開発 プルシアンブルーを固定化 雨どい汚染水 飲料水基準値以下に 〔6/8 科学新聞 6面、6/4 日刊工業新聞 18面、新潟日報 6面、5/31 新潟日報 6面、5/30 日刊水産経済新聞 3面、福島民報 19面、The Japan Times、5/29 毎日新聞 28面、読売新聞 31面、化学工業日報 10面、日刊工業新聞 19面、建設通信新聞 3面、日刊建設産業新聞 2面、5/28 朝日新聞 8面〕	【迫田章義研究室】 【工藤一秋研究室】 【立間徹研究室】 【石井和之研究室】
●東京大学生産技術研究所と先端科学技術研究センター 公開イベント 〔6/4 日刊建設工業新聞 2面、5/23 日刊工業新聞 21面、電波新聞 3面〕	【駒場リサーチキャンパス】

掲載項目について【●】で始まる項目は記者会見、「・」で始まる項目は研究に関する掲載記事です。

VISITS

外国人研究者講演会

8月8日(水) 司会：教授 岸 利治 Prof. HAN, Ningxu Shenzhen University, PR China SERVICE LIFE OF CONCRETE STRUCTURES - CONFUSION, CHALLENGE AND RE-THINKING	10月2日(火) 司会：教授 福谷 克之 Dr. Heike Arnolds Surface Science Research Centre Department of Chemistry University of Liverpool, England NONLINEAR OPTICAL SPECTROSCOPY OF INTERFACES
8月22日(水) 司会：教授 桜井 貴康 Prof. J. Fergus Nicol Prof. Chen-Yi Lee National Chiao Tung University, 台湾 INTRODUCTION TO NATIONAL PROGRAM FOR INTELLIGENT ELECTRONICS (NPIE)	

外国人客員研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
KOPOLA Harri Kalervo	フィンランド フィンランド技術研究センター(VTT) 教授・副センター長	2012. 9.1 ~ 2012.12.28	マイクロナノメカトロニクス 国際研究センター 藤田(博)研究室
HAATAINEN, Tomi Mikael	フィンランド フィンランド技術研究センター(VTT) 研究員	2012. 9.1 ~ 2013. 3.15	マイクロナノメカトロニクス 国際研究センター 年吉研究室

VISITS

■ 博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
YOUN Young Jik (尹 永直)	大韓民国	2012. 9.1 ~ 2013. 8.31	エネルギー工学連携研究センター 鹿園研究室

■ 準博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
AHMED Md. Raju	バングラデシュ	2012.10.1 ~ 2013. 3.31	情報・エレクトロニクス系部門 石井(勝)研究室

PERSONNEL

■ 人事異動

生産技術研究所 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 7.31	柴田 憲治	辞職	特任講師 ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構	助教 情報・エレクトロニクス系部門

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 9. 1	谷ノ内勇樹	採用	助教 物質・環境系部門	総合職 三菱マテリアル株式会社 中央研究所電子材料研究部

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 7.15	吉永 直樹	辞職	特任准教授	特任助教
24. 7.16	吉永 直樹	採用	特任准教授	特任助教
24. 8.16	西田 周平	採用	特任講師	博士研究員
24. 8.31	鈴木惣一朗	辞職	テクニカルスタッフ 独立行政法人理化学研究所	特任研究員

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 7.31	陳 柏宏	辞職	助理教授 交通大学(台湾)	特任研究員

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 7.31	平川 学	辞職	研究員 独立行政法人理化学研究所	学術支援専門職員

生産技術研究所 技術系

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 7. 7	飯塚 哲彦	休職更新	技術専門職員 情報・エレクトロニクス系部門	—

地球観測データ統合連携研究機構 教員等

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 8. 1	藤井 秀幸	採用	特任研究員	主任研究員 独立行政法人宇宙航空 研究開発機構 宇宙利用 ミッション本部 地球観 測研究センター
24. 8.11	KOUDELOVAA PETRA	育児休業 開始	特任研究員	—

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
24. 8. 1	柴田 憲治	採用	特任講師	助教 生産技術研究所

■ 昇任のご挨拶

情報・エレクトロニクス系部門
特任准教授

吉永 直樹



7月16日付けで情報・エレクトロニクス系部門の特任准教授に昇進いたしました。これまでコンピュータによる言語理解の実現をめざして、自然言語の文法理論に関する基礎的研究や、ウェブから世界知識を獲得する研究に従事して参りました。現在は膨大な実世界テキストに基づく社会分析を支援する超高速で頑健な言語解析基盤の構築を進めています。今後も引き続き世の中に溢れる言語情報を活用するためのIT基盤技術の研究に取り組んでいきたいと考えております。よろしくお願いたします。

■ 採用



●物質・環境系部門
助教
谷ノ内勇樹

PERSONNEL

■ 着任のご挨拶

機械・生体系部門
特任講師

西田 周平



ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
特任講師

柴田 憲治



8月16日付けで機械・生体系部門の特任講師に着任いたしました。これまで同部門におきまして、液中原子間力顕微鏡の開発と固液ナノ界面構造の研究に取り組んでまいりました。着任後は海洋アライアンスの一員として、海中探査ロボットに搭載する現場型ナノ計測デバイスの開発と海洋に関わる教育に携わります。新しい海の学問領域を開拓すべく全力で職務に邁進しますので、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

8月1日付けでナノ量子情報エレクトロニクス研究機構の特任講師に着任いたしました。専門はナノエレクトロニクスで、これまで量子ドットに代表されるナノ構造を用いた、1個の電荷やスピンを制御できるトランジスタの作製に取り組んできました。今後はこの方面をさらに推し進めると同時に、未開の電磁波であるテラヘルツ波を用いた電荷・スピン操作についても探求し、その知見を量子情報処理に応用することを目指したいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

AWARDS

■ 受賞 教職員

所属・研究室	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
基礎系部門 町田研究室	助教 守谷 頼	生研弥生賞 最優秀 東京大学生産技術研究所	酸化ナノ細線における単一ドメインの電流駆動	2012. 7.18
物質・環境系部門 井上研究室	助教 増野 敦信	生研弥生賞 優秀 東京大学生産技術研究所	超硬ガラスの開発	2012. 7.18
附属エネルギー工学 連携研究センター 鹿園研究室	助教 長谷川洋介	生研弥生賞 優秀 東京大学生産技術研究所	エネルギー有効利用のための多孔質3次元構造の決定論的最適化	2012. 7.18
情報・エレクトロニクス系部門	教授 石井 勝	CIGRE パリ大会日本論文優秀賞 日本 CIGRE 国内委員会	Studies of lightning protection design for wind power generation systems in Japan	2012. 7.20
附属海中工学国際 研究センター	教授 浦永橋 環 特任研究員 賢司	JAMSTEC 中西賞 日本海洋学会	ADCP 曳航と AUV 潜航で観測された伊是名海穴における底層流と高反射強度アノマリ	2012. 8. 2
情報・エレクトロニクス系部門	教授 石井 勝	Rudolf Heinrich Golde Award The Scientific Committee of the International Conference on Lightning Protection	for distinguished achievements in lightning protection, developing safe technologies and innovative uses and applications	2012. 9. 4

■ 学生 受賞

所属・研究室	学年・名前	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
機械・生体系部門 白樫研究室	研究実習生 渡部 貴大	低温生物工学会年会 ベストプレゼンテーション賞 低温生物工学会	LEA ペプチドによる巨大リボソームの乾燥保存の試みと分子メカニズムの考察	2012. 6. 1
情報・エレクトロニクス系部門 合原研究室	博士課程3年 徳田 慶太	第12回東京大学生命科学シンポジウム ポスター賞 東京大学生命科学ネットワーク	海馬局所場電位のカオスのダイナミクスによる数理モデル化	2012. 6.30
物質・環境系部門 迫田研究室	修士課程2年 吉田 翔	平成24年度化学工学会横浜大会 学生賞 銅賞 公益社団法人 化学工学会	エッジリッチなカーボンナノファイバーの官能基修飾による配向制御	2012. 8.30
物質・環境系部門 立間研究室	博士課程2年 古郷 敦史	Gold Scientist Prize 2012 (Outstanding Young Researcher) World Gold Council	Gold Cluster-Sensitized Photocatalysis Driven by Visible and Near Infrared Light	2012. 9. 8
物質・環境系部門 立間研究室	修士課程2年 小西 洋平	Poster Award The 6th International Conference on Gold Science, Technology and its Applications (Gold2012)	Photoelectrochemical Dip Formation in Spectrum of Plasmonic Au Nanoparticles on TiO ₂	2012. 9. 8

AWARDS

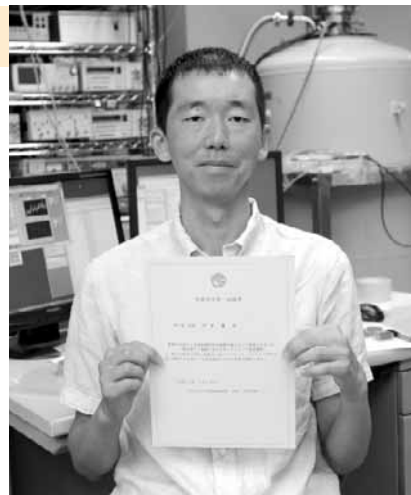
■受賞のことば

基礎系部門 町田研究室 助教 守谷 頼

平成 24 年度助教研究コンペティション 生研弥生賞 最優秀
「酸化物ナノ細線における単一ドメインの電流駆動」

好きな言葉があります。「創造性とは誰もできないような斬新な考え方を、他人とは質的に異なる“ユニークな能力”ではなく、必然的に起ころうとしている発見を誰よりも早くつかみ取る“効率の良さ”のことと考えられる」。60年代にアメリカの社会学者が発表した論文に書かれていたそうです。私は天才ではありませんし、何も全くないゼロの状態から何かを生み出

す才能はありません。しかし、過去から現在までにどんな研究が世界中で行われてきたかを勉強し、その流れとしてこの先どんな研究が必要とされているかを考えぬき、行動に移すことはできるはずで。それにゼロではなく、今回助教研究支援費をいただくことができました。この予算を元手に、今後研究を大きく進展させるよう日々勉強を続けていきたいと思えます。



物質・環境系部門 井上研究室 助教 増野 敦信

平成 24 年度助教研究コンペティション 生研弥生賞 優秀
「超硬ガラスの開発」

この度は平成 24 年度助教研究支援費において申請した研究テーマ「超硬ガラスの開発」に対して、生研弥生賞（優秀）を与您くださりありがとうございます。本テーマは、現在進めている研究とは違ったサイエンスを展開したいという思いから、一年以上前に考えついたものです。ただ、実験には全く手をつけていなかったため、結果はありませんでした。芽生えていないどころか種かどうかもわからないような本テーマに対して、スタートアッ

プの資金を支援していただけたことは、うれしい驚きでした。選考していただいた先生方、また本制度を支えてくださっている生研のすべての先生方に感謝申し上げます。今回の資金を元にお蔵入り寸前だった本研究を始動させることができました。今後、実験を進めることで、これまでの常識を覆すような新しい「超硬ガラス」を開発するとともに、関連する学術分野を発展させられればと考えています。



附属エネルギー工学連携研究センター 鹿園研究室 助教 長谷川 洋介

平成 24 年度助教研究コンペティション 生研弥生賞 優秀
「エネルギー有効利用のための多孔質 3 次元構造の決定論的最適化」

この度は、助教研究支援費を頂けることとなり、企画運営に携われた方々、所内の皆様に深く感謝申し上げます。今年 5 月に生研に異動したこともあり、新環境でのスタートアップにむけて、大きな後押しを頂いたと感じております。

生研に着任する以前は、ドイツのダルムシュタット大学に 2 年程滞在し、海外における共同研究の活発さに大きな刺激を受けました。特に、同世代の若手研究者が自立して、共同研究を進

める状況は、日本も見習うべき部分がありそうです。

異なる分野の研究者が同じ建物内で活動する生研では、多様な研究交流を持つ機会が十分にあり、海外の大学に近い雰囲気を感じます。こうした素晴らしい環境に身を置く機会を頂きましたので、様々な可能性にチャレンジしたいと考えております。

まだまだ未熟で、色々とお世話になることも多いかと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。



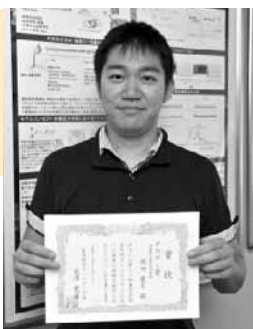
AWARDS

■受賞のことば

情報・エレクトロニクス系部門
合原研究室
博士課程3年

徳田 慶太

第12回東京大学生命科学シンポジウム ポスター賞
東京大学生命科学ネットワーク
「海馬局所場電位のカオスのダイナミクスによる数理モデル化」



このたび、第12回東京大学生命科学シンポジウムにおいてポスター賞を頂き、大変光栄に思っております。今回のシンポジウムでは、記憶や学習などの高次機能に重要な役割を果たしている海馬とよばれる部位における脳波の振動パターンを、数学的に説明する理論を発表しました。指導教員の合原一幸先生、共同研究者の香取勇一博士をはじめ、お世話になった方々に感謝いたします。

物質・環境系部門 迫田研究室
修士課程2年

吉田 翔

平成24年度化学工学会横浜大会
学生賞 銅賞
公益社団法人 化学工学会
「エッジリッチなカーボンナノファイバーの官能基修飾による配向制御」



この度、化学工学会横浜大会でポスター賞をいただきました。研究内容は、ナノ炭素材料の一種であるカーボンナノファイバーを微細加工基板上に位置選択的に配置させる手法開発です。今回の受賞を励みにして、さらに研究の質を向上させていきたいと考えております。日頃、研究方針や発表に関してご指導下さる迫田章義先生、実験に関する細かな助言を下さる藤田洋崇先生、基板の微細加工についてご指導下さいました大規模集積システム設計教育研究センター（VDEC）の澤村智紀氏など、研究室内外の多くの方々にお世話になりました。深く感謝いたします。

物質・環境系部門 立間研究室
博士課程2年

古郷 敦史

Gold Scientist Prize 2012
(Outstanding Young Researcher)
World Gold Council
「Gold Cluster-Sensitized
Photocatalysis Driven by Visible
and Near Infrared Light」



金クラスターを吸着させた酸化チタンの光触媒作用および光電変換特性を調べ、高効率化させた研究が評価され、World Gold Council より "Gold Scientist Prize 2012" をいただきました。先日の国際会議 Gold2012 では受賞講演を行い、最高の思い出になりました。賞品は何と純金の記念コインでした。

今までご指導くださった立間教授、坂井助教には感謝できません。どうもありがとうございました。更なる成果を目指して今後も頑張りたいと思います。

物質・環境系部門 立間研究室
修士課程2年

小西 洋平

Poster Award
The 6th International Conference
on Gold Science, Technology and
its Applications (Gold2012)
「Photoelectrochemical Dip
Formation in Spectrum of
Plasmonic Au Nanoparticles on TiO₂」



この度、金の科学に関する国際学会 GOLD2012 において、Poster Award をいただきました。200 以上もの最先端の研究の中から選ばれたことを光栄に思います。私の研究は(まだ道半ばですが)「ナノサイズの金の性質を利用し、光・酸化チタン・配位子を組み合わせることで金の色を変える」というもので、その基本原理を今回報告しました。

今回の受賞は立間先生、田邊さんをはじめ、研究室の皆様あってのものです。この場を借りて御礼申し上げます。

INFORMATION

■第8回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ

生産技術研究所ならびに総合文化研究科・教養学部共催の技術発表会を、下記の通り開催いたします。一般講演以外にも以下の様な講演をお願いしております。

「交流講演」と致しまして工学系研究科 機械工学専攻 技術専門職員 渡辺 誠氏、「垂直配向単層カーボンナノチューブ膜の伝熱実験への応用」、また工学系研究科 システム創成学専攻 技術専門員 金井 誠氏・技術職員 森田明保氏、「手動式万能試験機的设计」と題しまして講演をお願いしております。

また「招待講演」と致しまして先端科学技術研究センター 広報・情報室 技術専門職員 加藤 博氏、「先端研にお

ける情報系の業務について」、大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 分子科学研究所 装置開発室 技術職員 矢野隆行氏、「分子科学コミュニティに貢献する装置づくり」、また生産技術研究所 人間・社会系部門 技術専門員 高橋岳生氏、「風を追い、風と共に去りぬー風洞と過ごした38年」と題しまして講演をお願いしております。

様々な分野の講演内容となっておりますので皆様、奮ってご来聴下さい。

また、発表会終了後に懇親会を開催いたしますので併せてご参加ください。

記

日 時：平成 24 年 10 月 24 日（水） 9 時 30 分から 17 時

場 所：駒場Ⅱリサーチキャンパス 総合研究実験棟（An 棟）・コンベンションホール

【口 頭 発 表】

「長さスケールを含まない1方程式型サブグリッドスケールモデル」

生産技術研究所 基礎系部門 技術専門職員 小山省司

「警戒区域内での土壌サンプリングと線量」

教養学部・総合文化研究科 技術専門職員 滝澤 勉

「アバランシェフォトダイオード電子検出器の劣化と回復」

生産技術研究所 基礎系部門 技術専門職員 河内泰三

「ヘリウム回収用配管の設計と施工」

教養学部・総合文化研究科 技術職員 石坂 彰

「安全衛生管理室のご利用手引き」

生産技術研究所 安全衛生管理室 技術職員 近藤大介

【交 流 講 演】

「垂直配向単層カーボンナノチューブ膜の伝熱実験への応用」

工学系研究科 機械工学専攻 技術専門職員 渡辺 誠

「手動式万能試験機的设计」

工学系研究科 システム創成学専攻 技術専門員 金井 誠
システム創成学専攻 技術職員 森田明保

【招 待 講 演】

「先端研における情報系の業務について」

先端科学技術研究センター 広報・情報室 技術専門職員 加藤 博

「分子科学コミュニティに貢献する装置づくり」

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 分子科学研究所
装置開発室 技術職員 矢野隆行

「風を追い、風と共に去りぬー風洞と過ごした38年」

生産技術研究所 人間・社会系部門 技術専門員 高橋岳生

INFORMATION

●懇親会のお知らせ

発表会の限られた時間内で収まらなかった
討論などを引き続き懇親会の中で論議して頂
き、技術者同士の親交を深めて頂ければと思
います。

今回は催し物として藤井陽一 東大名誉教授
(元3部教員) のフルートの演奏を始め、他演
奏者の参加も含めた企画も考えております。

是非、この機会にご来聴頂ければ幸いです。
皆様の多くのご参加をお待ちしております。

日 時：平成 24 年 10 月 24 日 (水) 17 時 30 分から 19 時 30 分
会 場：駒場Ⅱリサーチキャンパス
総合研究実験棟 (An 棟)・コンベンションホール前ホワイエ
会 費：1,500 円
第 8 回 駒場キャンパス技術発表会実行委員会委員長 片桐俊彦
TEL : 03-5452-6143 / E-mail : toshi@iis.u-tokyo.ac.jp

平成 24 年度外国人研究者・留学生との懇談会のご案内

KOMABA RESEARCH CAMPUS INTERNATIONAL GARDEN PARTY 2012

生研および先端研における海外からの研究者・留学生らと日
本の研究者、職員・学生らとの交流を深めるため、今年も「祭」
形式による懇談会を開催いたします。屋台による各国の食事の
提供、各国の文化を知ってもらえるような展示やパフォーマンスな
どの催しを企画しておりますので、皆様ふるってご参加下さい。

駒場リサーチキャンパス外国人研究者・留学生との懇談会
実行委員会委員長 松浦 幹太

IIS and RCAST will hold the annual get-together,
“KOMABA RESEARCH CAMPUS INTERNATIONAL
GARDEN PARTY” to enhance friendship and
understanding among researchers, faculties and students-
both domestic and from overseas. Take this opportunity to
share something of your own country and culture through
food, displays, and performances so that we can all enjoy an
international and intercultural atmosphere. Please join us.

Kanta Matsuura

Chairperson of the Steering Committee of the
KOMABA RESEARCH CAMPUS
INTERNATIONAL GARDEN PARTY

詳 細

日 時：平成 24 年 10 月 25 日(木) 15:30 ~ 17:30
場 所：駒場Ⅱリサーチキャンパス
「ユニバーシティ広場」
参 加 方 法：事前申込制 締切：平成 24 年 10 月 3 日(水)
問 い 合 せ：国際交流チーム 内線 56039 (Cw204)
kokusai@iis.u-tokyo.ac.jp

※このイベントは生研、先端研に所属する教職員、学生及び
その家族が対象です。

Details

Date : Thursday, October 25, 2012 from 3:30pm to 5:30pm
Place : “University Square” in Komaba II Research
Campus
Participation: Registration only. RSVP by Wednesday Oct 3.
Contact : International Relations Section ext. 56039
(Cw204)
kokusai@iis.u-tokyo.ac.jp

* This event is planned for the IIS and RCAST
members and their families.



INFORMATION

■千葉実験所公開案内

本所千葉実験所は、駒場Ⅱリサーチキャンパスでは実施が難しい大規模な実験的研究やフィールドテストのための付属施設です。恒例となりました実験所公開を11月9日(金)に予定しております。進展の著しい研究活動と設備の充実した研究実験棟を是非この機会にご覧ください。

(千葉実験所管理運営委員会)

【駒場Ⅱから送迎バスも出ます】

記

日時：平成24年11月9日(金) 10:00～16:00

場所：東京大学生産技術研究所 千葉実験所

(JR総武線 西千葉駅北口下車 約250m)

特別企画開催時間に合わせて、駒場Ⅱリサーチキャンパスよりバスが出ます。ご利用の方は下記へお申し込みください。

行き 正門正面13号館前(時計台の建物) 11:30 出発(車内で飲食可)

帰り 千葉実験所ホワイトライノ前 16:00 出発予定

申込先 第5部 坂本慎一(内線:56427, sakamo@iis.u-tokyo.ac.jp)

特別企画

①特別講演会

13:30 - 14:20 海洋エネルギー研究の最前線—台風対応、漁業との共生、ニューコンセプト— (木下 健 教授)

14:20 - 14:50 AUV Tri-TON (トライトン) —海底熱水地帯の画像化に向けて— (巻 俊宏 准教授)

②デモンストレーション

15:00 - 15:30 海洋工学水槽(生産研水槽)とAUV Tri-TON

公開テーマと研究室

地盤に刻まれた地震の爪痕の解説……………小長井研究室・清田研究室

地震による建物の破壊過程を追う……………中埜研究室

海洋エネルギー、水産工学の新展開……………木下研究室

マイクロ波レーダによる水域モニタリング……………林研究室

高機能漁具の開発と電気分解による水質浄化……………北澤研究室

海底探査プラットフォームの未来形……………巻研究室

超を極めるプラスチック射出成形とパルプ射出成形……………横井研究室

自主講演会(10:30 - 12:00)

「最新の研究成果紹介—過去2年間のダイジェスト—」(横井秀俊 教授)

次世代高効率石炭ガス化技術開発……………堤研究室

プロペラファン空力騒音の予測……………加藤(千)研究室

ビークルシステムダイナミクスの展開……………須田研究室

モビリティにおける計測と制御……………中野(公)研究室

シリコンの高純度化……………前田研究室

持続可能なバイオマス利活用システム……………迫田研究室・望月研究室

実大テンセグリティ構造の建設と観測及びプレキャストシェル構造の建設……………藤井(明)研究室・川口研究室

ZEBを実現する新しいエネルギーシステム……………加藤(信)研究室・大岡研究室

建築を「賢く」使いこなす……………野城研究室

地震に弱い組構造建物の耐震補強を推進する技術と社会制度の研究

—世界の地震防災上の最重要課題への挑戦—……………目黒研究室

ひび割れ自己治癒コンクリートとコンクリート表層品質診断の取組み……………岸研究室

単板積層材耐力壁の水平加力実験……………腰原研究室

千葉試験線を活用した鉄道技術に関する包括的研究……………鉄道技術推進リサーチユニット

サスティナブルITSの展開研究……………先進モビリティ研究センター(ITSセンター)

持続可能なバイオマス利用システムの実現を目指して

エネルギー工学連携研究センター 特任准教授 望月 和博



バイオマスは光合成と二酸化炭素や水の循環に基づいて再生可能とされるカーボンニュートラルな資源である。特に農業を基盤とする途上国の近代化においては、非常に有望な再生可能エネルギーであると位置づけられている。ただし、本質的にバイオマスは再生可能であっても、再生量（成長量）と利用量（採取量）のバランスを保たないと、長期的な視点で再生可能（＝持続可能）な資源として利用することはできないという点に注意が必要である。また、ひとことにバイオマスと言っても、廃棄物系バイオマス、未利用バイオマスおよび資源作物と大別されるが、その由来や性質も大きく異なる。廃棄物系バイオマスは都市ゴミや家畜排せつ物などであり、その処理・処分と連動した利活用が議論される。農業副産物や林地残材などの未利用バイオマスの利用は、持続可能な農林業の展開とも密接である。資源作物は、大規模農業やプランテーションにおいて生産され、スケールメリットを生かした大規模集約型のバイオマスリファイナーを構築する際には不可欠な要素である。その大量生産は、土地利用、水資源、環境影響等の総合的な検証に基づいた、持続可能なシステムであることが重要である。このように多種多様であるバイオマスを相手に、その合理的な利用を検討するにあたっては、どのようなバイオマスをどのような目的で資源化するのかといった議論が重要となる。筆者は、そのなかでも地域分散型でのバイオマス利用に着目して、地域システムの構築に関するソフト開発およびそのシステムを実現するハードウェアの研究を連携させながら進めている。

システム構築に関する研究では、地域内で得られるバイオマス資源を、その地域で必要とされる製品やエネルギーとして有効に活用して循環型社会の構築に貢献する仕組みであるバイオマスタウンの考え方に沿って、「バイオマスタウン設計・評価支援ツール」(図1)を開発し、具体的な地域におけるバイオマス利活用システムを構築するためのシナリオ分析を実施している。本ツールを用い、利用するバイオマス資源/プロセス/副資材・ユーティリティ/得られる製品(群)・副産物等をさまざまに組合せたモデルを試算することで、地域の現状を把握し、適正なプロセスの組合せ、物質循環、エネルギー収支等を評価する。またLCAの議論を含めたコストや環境影響の分析への応用を試みている。

バイオマス利用システムの設計・評価を通して、その実用化に向けた技術的な課題も明らかとなってくる。地域分散型に着目したバイオマス利用システムにおいて、廃棄物系バイオマスや未利用バイオマスを中心に、地域で利用可能なバイオマスを無駄なく総合利用することを目指した小規模バイオマスリファイナーを提案している。原料とするバイオマスの種類や生産規模は地域システムとしての合理性を重視するため小規模である。そのためプロセス本体としては効率化が図りにくいという課題が生じる。そ

の解決のため、低コスト装置の開発、プロセス内でのエネルギーカスケード利用、地域需要にマッチした製品化および副産物の有効利用などをキーワードに、パイロットスケールのプロセス(図2)にて技術的な検討を行っている。ここでは、東南アジアにおける稲作由来のバイオマスの有効利用に着目し、稲わらからのバイオエタノール製造ともみ殻からの炭化物製造を組み合わせ、炭化装置からの排熱をバイオエタノールプロセスの熱源として利用し、化石燃料に依存せずにバイオエタノールともみ殻炭を製品として地域に供給する仕組みの実現を目指している。このように、ソフト・ハードの両面からのアプローチをより密接に統合し、地域の環境や既存の農林業生産と融合した持続可能な地域バイオマス利用の実現に貢献する研究を進めてゆきたい。

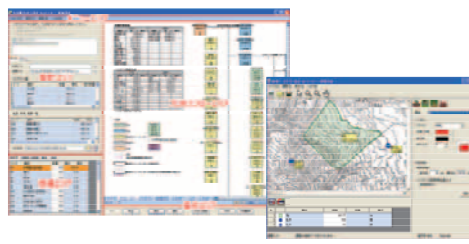


図1 バイオマスタウン設計・評価支援ツール (BiTS: Biomass Town Simulator)

科学技術振興調整費・科学技術連携施策群「バイオマス利活用システムの設計・評価手法」2005-2007年度、農林水産技術会議事務局委託事業・地域活性化のためのバイオマス利用技術の開発「関東都市近郊農業地域におけるバイオマス利用モデルの構築・実証・評価」2007-2011年度

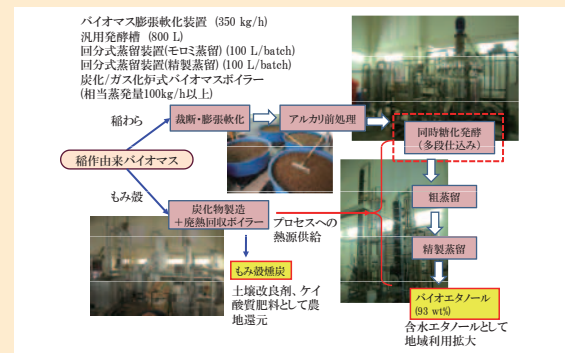


図2 ベトナム・ホーチミン市工科大学に設置したバイオリファイナーパイロットプラント

JICA-JST・地球規模課題対応国際科学技術協力事業・SATREPS「持続可能な地域農業・バイオマス産業の融合」2009-2014年度

■編集後記■

10月に限らず区切りの良い日が来ると、人事上いろいろな交替があるようです。生研は事務組織と教員の距離感が極めて小さく、教員側が様々な面でサポートしていただいているのをいつも感じています。それは、研究室数に対し凡そ同数の事務の方が居られるからでしょうか。そういった方々に対して早くに挨拶もできず、ご栄転やご退職の後から知ることが多く、とても残念に感じるこ

が少なくありません。我々ニュース部会では、原稿作成の時点で様々な方々の入所退所をいち早く知ることがあります。ですので、挨拶に伺う機会を得ることがまだできています。こういったニュースも迅速に皆様の元にお届けし、コミュニケーションのお役に少しでも立てることを願っています。

(小倉 賢)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所
☎(03)5452-6017 内線56017.56018
■編集スタッフ
小倉 賢・清田 隆・北澤 大輔
高宮 真・太田 浩史・三井 伸子
E-mail: iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp
生研ホームページ
http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/